過日、文楽の通し狂言「義経千本桜」を見たり。従前数回文楽を観劇せしかども、さほど面白しとは思はざりけり。人形の口、眉、目の動くを珍しと思ふほどのことなり。なれど、今回は、人形ならで、二人の人形遣ひに目を奪はれたり。

一人は吉田一輔、静御前を遣ひけり。静御前は、ときに艶めかしく、ときに可愛らしく、一輔に抱かるる恋人の如し。その一輔、無表情の中に、愛しき恋人を守り抜かむとするかの思ひ、滲みけり。

今ひとり源九郎狐を遣ふ桐竹勘十郎、人間国宝なり。齢七十二にして、狐を軽々と持ち上げ、舞台を所狭しと駆け回り、愛嬌満ち満てる狐の仕草を随所に散りばめたり。大団円の宙乗りには、拍手喝采、大盛り上がりとなりけり。勘十郎、炯炯たる眼光の中に、狐と一体化し、役を楽しむ余裕さへ感じさする表情なりけり。

人形遣ひを見るもまた文楽の楽しみなるを知りたることこそ、今回得られたる貴重なる経験なれ。